

小噺・落語入門サロン

■ 前座 (今日の話題・話のネタ)

「ヒライ信」201号 噺と咄 吐くと叶う
落語歳時記シリーズ



9月の落語「そろそろ」

昔、江戸は浅草の観音様のうら田んぼのまん中に、小さな古びたお稲荷さんがありました。そのそばに、これまた、小さなさびれた茶店。おじいさんと、おばあさんの二人が細々とやっているという。おばあさんが「お稲荷様にお参りに行ってはどうですか」とすすめるおじいさんは言うとおりに神社へ行き、茶店の繁盛を懸命に祈った。

おじいさんが戻って間もなく、雨が降り出し、ひとりの参詣客が雨宿りにやって来る。茶を飲み終え、店を出ようとした客が引き返し、「地面がぬかるんでいるので、ワラジを買う。老夫婦が「ご利益だろうか」と思っていると、別の客が来て「ワラジをくれないか」と注文する。「申し訳ありませんが、たった今売り切れてしましまして」「何を言っている。そこに1足あるではないか」おじいさんが振り返ると、売り切ったはずのワラジがある。

「客がワラジを買うたび、新しいワラジがそろそろと下りてくる。下りたら下りるだけ、ワラジが売れていく。

やはりお稲荷様のご利益だ。

茶店の向かいの床屋の主人は、かつての茶店同様に寂れている。茶店が繁盛していくさまを見聞きし、うらやましがり、稲荷神社に参詣して祈りをささげる。

床屋が店に戻ると、店は客であふれかえっている。床屋は「さっそくのご利益だ」と喜び、カミソリで客のひげを剃る。するとたちまち、新しいひげがそろそろと生えてきた。



■ 二つ目 (小咄の稽古)

映像や音声から学ぶ、小ばなしのコツ・つぼ
「プロに学ぶ小噺の話し方」「酔っぱらいの癖”
そのあと、皆さんの小ばなし披露とアドバイス

■ 大喜利

今回も **謎かけ** で、お題は「宝くじ」「敬老の日」とかけて

次回は2024年10月7日(月)「栗」「目」とかけて